

社会的活動が性暴力被害者の心理的回復に及ぼす影響

—出来事中心性の観点からインタビュー調査に基づく検討—

岡田 ほのか・増田 成美・上岸 光太・上手 由香

The effect of social activities on the psychological recovery of sexual violence survivors:
-A study based on an interview survey from the perspective of event centrality-

Honoka Okada, Narumi Masuda, Kota Jogan and Yuka Kamite

High event-centeredness among survivors of sexual violence has been shown to harm mental health. This study aimed to clarify the influence of social activities on the recovery of sexual violence survivors. A questionnaire survey and semi-structured interviews were conducted with five socially active female survivors of sexual violence. The respondents were expected to be highly event-centered. The questionnaire survey results indicated that socially active survivors of sexual violence were highly event-centered. As a result of thematic analysis of the narratives obtained from the interviews, the following themes were obtained as positive influences of social activities: "valuing oneself and increasing self-affirmation," "reconsidering the experience of victimization and reshaping one's perception of victimization," and "living in the present in one's own way." The influence of these social activities reduced the feeling of not being able to value oneself and the sense of self-blame caused by the sexual violence. These findings suggest that the positive influence of social activities can restore mental health even when event-centeredness is high. Therefore, these activities could help support survivors of sexual violence who are presumed to be highly event-centered.

キーワード : sexual violence, survivor, event-centeredness, social activity, narrative

問 題

性暴力とは、WHOによると「不同意性交に加えて、当事者の望まない性的言動およびこれらの未遂も含むものであり、被害状況や加害者との関係性いかに関わらない」と定義されている (Krug, Dahlberg, Mercy, Zwi, & Lozano, 2002)。世界的には、性暴力には様々な形態があり、レイプ、セクシャルハラスメント、性的虐待/暴行、強制的な結婚または同居、性器切除および強制売春、性的搾取を目的とした人身売買などが含まれるが、これらに限定されない (WHO, 2013)。

近年、日本において、性暴力被害者に対する社会的な制度や被害者支援は徐々に整い始めている。

2017年に各都道府県警察の性犯罪被害相談電話窓口に繋がる短縮ダイヤル番号が導入されたり、同年に従来の強姦罪や強制わいせつ罪などの刑法が一部改正される法律が成立した(法務省, 2020)。2019年には性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップセンターが各都道府県に設置された。しかし、一部改正された刑法も暴行強迫が伴うものに限定されるなど、いまだ被害者支援や法改正は十分でない。

2019年の強制性交等の認知件数は1405件、強制わいせつの認知件数は4900件(法務省, 2020)である一方で、全国のワンストップセンターへの相談件数は2019年6月～8月で約9450件にものぼる(内閣府, 2020)。また、内閣府の匿名調査では、無理やり性交等をされた者のうち、被害を「どこにも相談しなかった」者は59.9%であり(内閣府, 2021)、Ahrens, Campbell, Ternier-Thames, Wasco, & Sefl (2007)は、最初の被害の開示は、約75%が家族・友達等の非公式の支援者に対して行われることや、約3割以上が開示は被害者からなされなかったことを明らかにしている。さらに、開示した場合も相手からの否定的な反応により、自己非難の感情を強めることや今後の開示に疑問を抱くようになることが示された。以上のことから、性暴力被害は暗数が多く、被害の開示には高いハードルがあることが推察される。しかし、性暴力被害者が支援を受けるには開示の必要がある。齊藤・岡本・大竹(2019)によれば、被害認識が早くに形成されるほど、これらの援助希求行動も早まることが明らかとなっており、より実態に近い性暴力のイメージを持つことが被害認識の形成を早めることが示唆されている。

上記のように、性暴力被害に対して、社会的には支援体制が不十分であり、その開示及び回復には困難さが推察される。加えて、性暴力は、うつ病、不安障害、自傷行為などのリスクを2.5倍前後まで高めるなど、精神疾患のリスク要因であることが指摘されてきた(WHO, 2013)。また、PTSDに最も一般的に関連する外傷は、女性では強姦と強制わいせつであることも示されている(Kessler, Sonnega, Bromet, Hughes, & Nelson, 1995)。さらに、精神的健康だけでなく、齊藤他(2019)は、性暴力被害者へのインタビュー調査の結果、『尊厳/主体性への侵害』や『親密な関係や性的関係への侵害』などの性暴力被害による人生への影響を明らかにし、被害者が自分の望む人生を生きることが出来ない状態になることを示唆した。以上のことから、性暴力被害は長期にわたって影響を及ぼす深刻な被害であると考えられる。

ところで、過去のトラウマ的事象がアイデンティティの形成に与えている影響の大きさを測定するために、出来事中心性尺度(Centrality of Event Scale: 以下CES)が開発されている(Berntsen & Rubin, 2006)。CESは、心的外傷イベントの主観的経験を捉えているため、心的外傷後の苦痛にとって特に重要であるとされている(Campbell, Dworkin, & Cabral, 2009)。CES得点はPTSD症状およびうつ病と高い相関があることが示されている(Berntsen & Rubin, 2006)。Boals & Schuettler(2011)の調査では、一般の大学生のCES得点の平均は17.90であったが、Hamrick & Owens(2021)では、性的暴行を受けた女性のCES得点の平均は24.97であった。このことから、性暴力被害者は、出来事中心性が高いことが推察される。また、性的虐待を受けた経験のある女性においても、CES得点はPTSD症状およびうつ病との正の相関が示され、さらにCES得点と自尊心の間に負の関連が示された(Robinaugh & McNally, 2011)。このことから、性暴力被害というトラウマ的事象に対する出来事

中心性が高いことは、精神的健康に悪影響を及ぼす可能性がある。

先述した性暴力被害の深刻さに対して、性暴力抑止のために、性暴力のイメージを変える社会啓発・教育の必要性が指摘されており(齊藤・大竹, 2020), 「性犯罪が性暴力被害の実態を反映したものになるために被害者が伝え続ける必要がある」と性暴力被害者の中でも社会的活動を行う者がいる(山本, 2017)。社会的活動をする性暴力被害当事者は、その活動を通して自身の被害について想起する機会が多く、過去のトラウマ的事象がライフストーリーの中心になっていると考えられ、性暴力被害者の中でも特に出来事中心性が高いことが予想される。また、性暴力被害にはレイプ神話という特有の偏見があることが指摘されており(Burt, 1980), それは一部の偏った男性だけに持たれる特殊な信念ではなく、広く一般の人々のなかに存在することが示されている(大淵・石毛・山入端・井上, 1985)。また、性暴力被害者がPTSD症状を示した要因として自責感の強さが示唆されており、被害後の対応について「なぜ逃げなかったのか」などレイプ神話に伴う二次被害を受けることで自責感が助長され、被害者の回復を妨げることが明らかとなっている(野坂, 2010)。他にも、二宮・村本(2006)は、性暴力被害後の裁判を行う過程で、陳述や証言によって、フラッシュバック、その他の症状が悪化することは大いにあると指摘している。以上のことから、社会的活動をすることによって、性暴力被害当事者の精神的健康の回復が妨げられる可能性が推察される。

一方で、吉田(2012)では、社会に向けて自分自身の病の体験を語る当事者は、その活動を通して回復のプロセスを辿っていることも示されていることから、社会的活動を通して精神的回復へのポジティブな影響を受ける可能性も考えられる。以上のことから、性暴力被害者自身が社会的活動に参加する場合、上記のような偏見などのネガティブな影響、あるいは、なんらかのポジティブな影響が生じる可能性がある。そこで本研究では、性暴力被害者の精神的健康の回復に社会的活動がどのような影響を与えているかを検討する。そのために、出来事中心性が高いと予想される社会的活動をする性暴力被害者を対象に、性暴力被害による影響と、性暴力被害者が社会的活動をするもののポジティブな影響、ネガティブな影響を出来事中心性の観点から探索的に調査することを目的とする。

方 法

対象 支援機関及び当事者団体を通じて、調査への協力の募集を行ったところ、性暴力被害者であり社会的活動をする5名の女性の同意が得られ、質問紙調査、面接調査を実施した。

質問紙調査 以下の尺度を使用した。①出来事中心性尺度(CES): Berntsen & Rubin(2006)の日本語短縮版(ルービン・バーントセン, 2008)。7項目5件法。②改訂版出来事インパクト尺度(IES-R): 日本語版(Asukai et al, 2002)。22項目5件法。

面接調査 約2時間程度の半構造化面接を実施した。面接では、①被害状況、②加害者や自分自身への感じ方の変化、③被害による人生への影響、④社会的活動を始めた動機、⑤社会的活動による影響について質問を行った。

分析方法 ナラティブ・エスノグラフィー法(Otake, 2017)に基づき、テーマ分析を行った。具

体的には、面接調査の音声データから逐語録を作成し、各参加者の逐語録から、性暴力被害による影響と、社会的活動による変化に関する箇所を切り取った。切り取った語りから共通する内容の語りをコード化し、さらにコード間で共通するテーマを抽出した。

倫理的配慮 広島大学の倫理委員会の倫理審査の承認を得て本研究を実施した。また、インタビューに際しては、話せる範囲で十分であり回答を拒否する権利があること、面接中止を求めることができることを説明した。個別に研究倫理を説明し、同意を得た場合のみインタビューを実施した。

結 果

参加者プロフィール 参加者の基本情報と IES-R 得点、CES 得点を Table 1 に示した。参加者の平均年齢は、42.60 歳 ($SD = 12.54$) であった。

Table 1

参加者のプロフィール

	年齢	性別	活動の立場	活動歴	IES-R得点	CES得点
A	20代	女性	ピアサポーター	1年	33	28
B	40代	女性	活動家	7年	54	35
C	30代	女性	活動家	3年	35	32
D	50代	女性	相談員	10年	24	25
E	50代	女性	相談員	5年	2	30

5名の IES-R 得点の平均は、29.60 点 ($SD = 18.90$) であった。IES-R は、カットオフ値が 25 点のため (Asukai et al, 2002), 合計得点が 25 点以上であった A さん, B さん, C さんは性暴力被害による現在の PTSD 症状が強く、現在の精神的健康に影響を与えていることが示された。

5名の CES 得点の平均は 30.00 点 ($SD = 3.80$) であった。CES は、尺度の合計得点の範囲は 7~35 点であり、カットオフ値はなく、合計得点が高いほど出来事中心性が高い。本研究では 5 名とも、Hamrick & Owens (2021) での性的暴行を受けた女性の平均値 (24.97) 以上の得点を示し、性暴力を受けた体験が人生の中でアイデンティティの中核に位置することが推察された。社会的活動を行う性暴力被害者は CES 得点が高いという仮説は支持された結果となった。

報告された被害 5名へのインタビューの中で、報告された性暴力被害は 11 件であった。被害時の年齢や加害者との関係、被害の種類について Table2 に示した。

Table 2
報告された被害の内訳

	件数
報告された性暴力被害件数	11件
18歳以前の件数	7件
13歳以前の件数	6件
加害者との関係	
見知らぬ人	2件
知人	4件
親族	5件
被害の種類	
単回性の被害	7件
長期反復型の被害	4件

質的分析 面接データから、性暴力被害による影響、社会的活動をする中で精神的健康に与えるポジティブな影響・ネガティブな影響について分析を行った。語りに共通するコードを「」, コードから抽出されたテーマを『』で示した。インタビューデータ内の調査者の発言を〈 〉で示した。

1. 性暴力被害による影響

性暴力被害による影響に関する語りからは、『自分を大切にできない』、『現実感や生きている心地の喪失』、『被害認識が形成されない／曖昧な被害認識』が抽出された。被害によって「コントロール感の喪失・尊厳の侵害」, 「自分の無価値化・自尊心の低下」が生じるなど、『自分を大切にできない』感覚が生じることが示された。これに加えて、『現実感や生きている心地の喪失』や『被害認識が形成されない／曖昧な被害認識』によって, 「対人関係での困難さ」, 「精神症状」, 「自責感・罪悪感」等のさまざまな症状や心理的苦痛、『人生への影響』が生じていることが示された (Figure 1)。

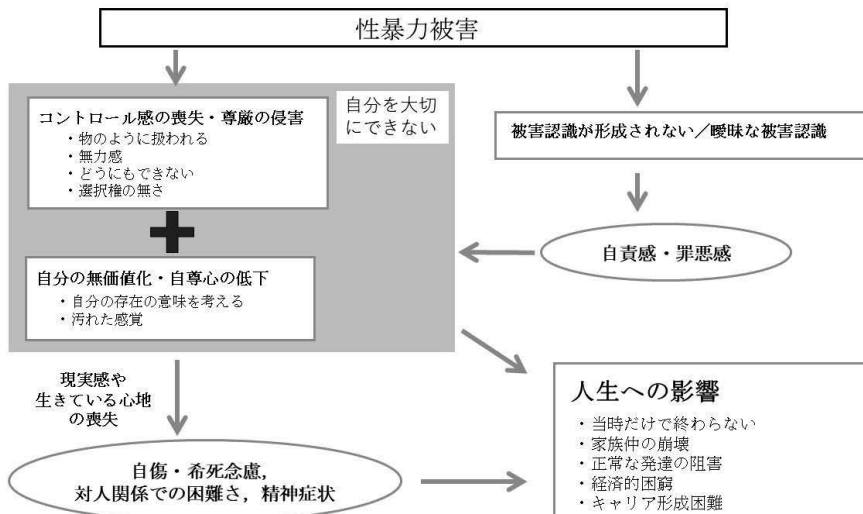


Figure 1. 性暴力被害による影響。

2. 社会的活動によるポジティブな影響

複数のデータから得られたコードを検討した結果、社会的活動による精神的健康に与えるポジティブな影響として、『自分を大切にする・自己肯定感の高まり』、『被害のとらえ直し・被害認識の再形成』、『自分らしく今を生きる』のテーマが抽出された。『自分を大切にする・自己肯定感の高まり』は、「居場所感や安心感の構築」がなされ、「自分が必要とされる・役に立つ感覚を得る」ことにより、他者に大切にされる体験を通して自分を大切にできるようになったり、自分を認められるようになることを示す。これによって、生活の安定や精神症状が軽減して「回復しつつある自分を感じる」様子や、『自分らしく今を生きる』様子が示された。また、「居場所感や安心感の構築」がなされたり、「自分が必要とされる・役に立つ感覚を得る」ことは、必ずしも社会的活動のみによって得られた結果ではなく、当事者にとっての他のサポート源（家庭内の支援者、他の仕事での居場所）によって得られる場合もみられた。『被害のとらえ直し・被害認識の再形成』では、社会的活動を通して体験・認知したものを自身の被害に当てはめて再考することであり、「自責感の軽減」につながることを示された (Figure 2)。次に、抽出された3つのテーマとそこに含まれるコードおよび具体的な語りについて述べる。

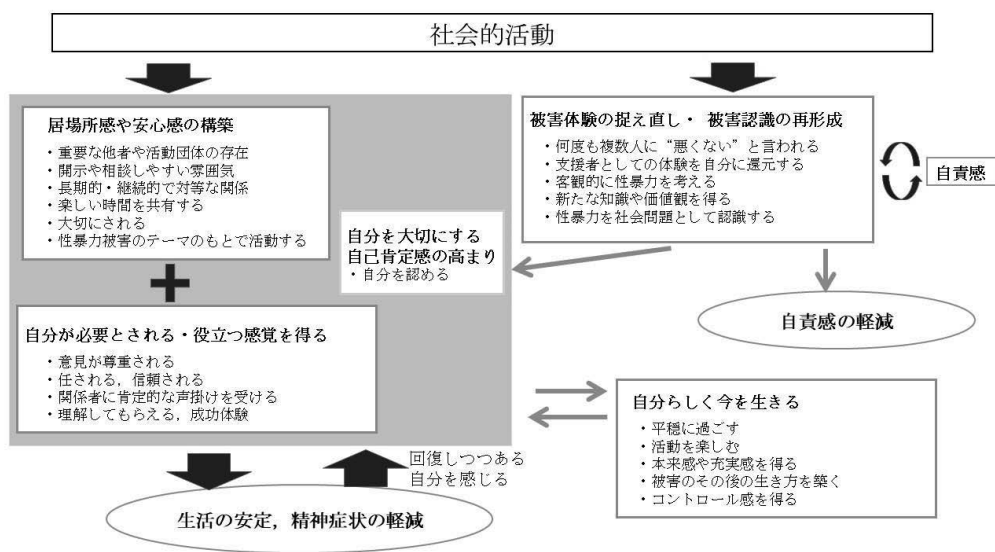


Figure 2. 社会的活動による回復へのポジティブな影響。

2-1. 『自分を大切にする・自己肯定感の高まり』

「居場所感や安心の構築」に加えて「自分が必要とされる・役に立つ感覚を得る」ことによって『自分を大切にする・自己肯定感の高まり』が生じることが示された。具体的には、社会的活動の団体や重要な他者にとって自分が大事な存在であると認識することや、団体のメンバーや関係者に肯定的な声掛けを受けることによって、自分を認め、『自分を大切にする・自己肯定感の高まり』が

生じることが示された。次に、『自分を大切にする・自己肯定感の高まり』に含まれる各コードの詳細について述べる。

「居場所感や安心感の構築」

「居場所感や安心感の構築」は、所属する活動団体や、その仲間の中で安心感や安全感を得ることを示す。「居場所感や安心感の構築」は、全員に共通して語られたテーマであり、その他のテーマにも影響を与えていることが示唆された。参加者は、社会的活動を始めた際のきっかけとなる人物や同じ団体の信頼できる人物、親族の支援者を重要な他者として挙げた。これらの重要な他者を中心に信頼関係が結ばれて、重要な他者や所属団体において「居場所感や安心感の構築」がなされ、安心感・安全感を得る様子が語られた。安心感や安全感を得るために必要な重要な他者の態度や要因として、開示や相談のしやすい雰囲気、長期継続的で対等な関係、性暴力・性被害のテーマのもとで活動する、楽しい時間を共有するといったことが挙げられた。

Cさんは、被害について所属団体内で開示しており、特に性暴力被害の当事者が多い団体に所属している。団体の仲間は性暴力被害を偏見なしに受け入れる雰囲気があり、被害を隠さなくてもよいため、“すごく居心地がいい存在”“すごい信頼してますね”と語った。加えて、当事者だからこそ分かる被害による影響への理解があることも相談しやすい環境であり、それによって症状も安定していると、以下のように語った。

社会的活動を始めて(症状の)波が少なくなったように感じますし、一番いいのは例えばアニバーサリー反応が出てたとしたら、いまアニバーサリー反応で辛いだよねっていうのを社会的活動の仲間に全然言えることってとても大きくて、ここまで繊細な内容は仲いい子に言えるわけじゃないし、アニバーサリー反応って何って話だし、まず。なので共通用語があることはすごく楽だなと思います。あと同じ感覚をみんなが味わっているんで、アニバーサリー反応がどう辛いとか、どれぐらい続くかとか、もういちいち説明しなくても10わかってる感じで、辛いよね、本当に無理しないでねとか、(言ってくれる)。(Cさん)

また、重要な他者は必ずしも性暴力被害当事者であるわけではなく、非当事者も含まれる。次にあげるAさんとDさんは、同じ団体の非当事者が重要な他者となっており、その存在について以下のように語った。

心理的なことも、よくないことがあったらすぐ誰かに相談できるようになりました。(きっかけは?)やっぱその(重要な他者)とか(団体名)のメンバーが、話しても否定的な反応なしで真剣に考えてくれて、どうしたらいいのか真剣に考えてくれて、一緒に解決策を考えてくれる。(Aさん)

支援者としてはそこ(当事者だからこそ支援者に必要なポイントに気づけること)を強みにするしかないと思っていて、もっと細かいポイントかもしれないけど、ちょっとした言葉遣いとか、雰囲気とか、それは言うようにしている。言ってもうちの場合は(重要な他者)がちやんと聞いてくれるし、そういう関係ができて

いる気がします。(Dさん)

このように、上述の要素に加え、当事者意識を持った関わりや意見が尊重されるなどの要素が、信頼関係を強め、「居場所感や安心感の構築」に重要な役割を果たしていることが窺えた。

「自分が必要とされる・役に立つ感覚を得る」

活動を長期的に継続できていることや仕事を任されることによる自信や充足感、あるいは、重要な他者や活動の中で出会う関係者から肯定的な声掛けを受けたり、理解してもらえた成功体験によって、「自分が必要とされる・役に立つ感覚を得る」ことが示された。電話相談を受ける相談員として主に活動するEさんは以下のように語った。

(電話相談に) 対応できたっていう自尊心もあるし、5年なんやかんやで続けているっていう、(中略) 楽じゃないし、扱う内容も重たいので精神的にもくるけど、それでも続けてこれているということが、自分でも役に立つことがあるんだとか、できることがあるんだっていう充足感満足感っていうのと。(Eさん)

このように、性暴力被害に関する相談に対応できていることによって、“自尊心もある”と語り、加えて、Eさんは、性暴力という自身と同じテーマのもとで活動していることが“居場所というか、人生の中での位置”になっており、それらによって生きることが楽になったと語った。また、「自分が必要とされる・役に立つ感覚を得る」ことによって、被害により生じた希死念慮が軽減されることも示唆された。これについて、Aさん、Bさんは以下のように語った。

(主催した) イベントがあつてから、川を見たら飛び込みたいとか、バスに乗ったら事故つたらいいのにかと思ってたのが、実際それ起きたら、イベントに来てくれたみんなとか(重要な他者)や(団体名)のメンバーが悲しむだろうなとか思うようになって、それがどんどん増えて、あんまり死に対する考えはしなくなつたんですかね。(Aさん)

すぐに解離をしてしまつたりとか、なんか思いもよらない行動、例えば自殺未遂とか、そういうことをしてしまうような私だったんですが、社会的活動を始めて、耐性領域がぐつと広がつたような気がします。それがすごく大きいことだと思う。それはなんでもかかって思ったときに思ったのが、(中略) あらゆる職業の人と、活動をする中で私は被害当事者だというある意味専門性を自分も提供できているというところで、そこですごく、目的は一つっていうときに、英知を出し合うというか、(中略) まずその無力を感じ続けていた私だったらまず出会えないような職業の人と一緒に活動することが出来て、触れ合うことが出来るのがすごく耐性領域を広げていることに繋がっているなと思います。(Bさん)

このように、当事者である支援者として、社会の役に立つ感覚や誰かに必要とされることが、自身の症状や心理的苦痛の軽減に繋がっていることが語られた。

「回復しつつある自分を感じる」

活動を通して症状の軽減が図られ、「回復しつつある自分」を感じる様子が語られた。例えば、性暴力被害によって“自分の身体じゃない感覚”や“皮膚で守られてない”“肉の塊でそこにいる感覚”が生じていた D さんは以下のように語った。

ちよつとずつ、皮膚を触ったりして、あ、あるとかね、自分なりにこれは全部私の物だって感覚を。ここ 10 年は特に自分を大事にするっていうことを中心に、そこをポイントに生きてきたので、少しずつ感覚が戻ってきたというか、(中略) 支援をするようになってから、そういうお勉強をするようになってから、自分の感覚を、ちよつとこんな感覚かなって。(D さん)

また、C さんは、講演活動をすることによる影響について、同じ団体のメンバーから、フィードバックや肯定的な声掛けを受け、“おのずと自己肯定感が上がる”“自分はすごく頑張っているんだなと認識できる”と語った。それに加えて、社会的活動による影響を以下のように語った。

全然人に話せない、辛くて一人で家で閉じこもっちゃう時期も長かったけど、こうやって人の前で話せるようになったんだとか、そういう所に自己効力感とかも一緒に感じるようになったのが大きいなと思います。(C さん)

このことから、C さんは被害から「回復しつつある自分を感じる」ことで、さらに自分を認める気持ちが芽生え、「自分を大切にする・自己肯定感の高まり」に繋がったと考えられる。その後、性暴力被害に関する新しい別の仕事にチャレンジすることに繋がり、今後の活動にも意欲的になったことも語られた(後述)。

2-2. 『被害のとらえ直し・被害認識の再形成』

次に、『被害の捉え直し・被害認識の再形成』とそこに含まれるコードについて述べる。

調査参加者からは、被害当事者として様々な人から何度も、“あなたは悪くない”と言われる、支援者として被害当事者への対応から、新しい知識や価値観を得る、社会的問題として捉えるといったことにより、自身の被害を捉えなおしたり、被害認識がさらに高まることが語られた。これらによって、改めて被害認識が再形成され、同時に自責感が軽減されるなど、社会活動によって得た体験が自身にも還元される過程が示唆された。

「被害者として何度もあなたは悪くないと言われる」

被害時に罪悪感があり、自分が被害に遭っている事実が分からず、被害認識の形成が困難であった A さんは、精神科病院や母親から二次被害を受けたこともあり、開示の困難さや自責感が強く生じていた。A さんは被害後から現在に至るまでの自責感の変化について以下のように語った。

多分今まで、本当に色々な人にAちゃんのせいじゃないって言われてきたんですけど、その言葉を聞いた時点でいきなりハッと気づきがあったわけじゃないんですよ。でもそれをいっぱい聞いて重なって、それに納得して、心に溜まっていくみたいなの。(Aさん)

このように、重要な他者や活動をする中で出会った関係者など様々な人に、何度もあなたは悪くないと言われる体験は、少しずつ蓄積されていき自責感の軽減に繋がることが示された。

「支援者としての体験を自分に還元する」

支援者という立場で、被害者は悪くないことや自分を守ることを、他の被害者に繰り返し伝えたり、体験的に学ぶことで、自責感の軽減や自分を大切に感じる感覚に繋がることが示された。DさんとBさんは支援者としての経験が自身の自責感に与える影響について、以下のように語った。

支援をしていて、すごく人に何回もあなたは悪くないよって、それは加害者のせいだよって、あなたがそれをしたとしても性的なことじゃなくていいよって、今まで何回も何百回も人に伝えて、自分もそうなんだなってちょっとずつ。1回言っただけでその人がああそうですねっていうケースはほとんどないと思いますが、何回も何回もそう接してもらって、自分にもそういう声をかけてあげることができるようになっていく気がします。これは支援してないと感じない、回復の力というか、そこは支援をしていて良かったと思います。(Dさん)

(家族との関係に関する決断について) その決断が出来たのは今の(団体名)で活動してたからだと思います。前だったらそんな思い切ったような決断はできなかったと思うんですけど、活動することによって、被害者が受けられる支援とか、今ないけれども私たちこんなことを必要としていますよとか言い続けていると、自分に何が必要でどういう支援が本当に必要だったのかとか考えると、今でもできる物を探したくなるというか、今でも自分を守ることがあるんじゃないかという思考になるんですね。(Bさん)

このように、支援を通して客観的に性暴力被害を捉えて、自身の体験にも照らし合わせて再考し、自責感が軽減したり、自分を大切に感じる感覚に繋がることが示された。また、先述の「被害者として何度もあなたは悪くないと言われる」と共通することとして、繰り返し何度も他者から言葉をかけられたり、自分自身が支援者として口にするすることで、少しずつ自責感の軽減につながることを示された。

「性教育の知識や新たな価値観を得る」

支援をするうえで必要な勉強や、支援をする中で出会った関係者からの言葉により、新たな知識や価値観を得ることが語られた。例えば、BさんとDさんは、以下のように語った。

全ての男性が支配欲や、コントロールできない性欲や男性性の誇示をしたい男性ばかりではないと気づけたことも大きいですね。(中略) そういうことを打ち明けてくれる男性っていうのは、私がどういう人間で、こういう活動をしている人間だって言った時なんですね、(中略) そういう時に自分はこういう風に思っていると、それは一部の男性で、そう思わない男性もいるんだっていうことを言ってくれる男性が多かった。そういう人たちと知り合えた、言葉を交わせたということもすごく大きな体験の一つですね。(Bさん)

(支援者講習を受けるなど) 支援することでいっぱい学んだことが、ある意味、境界線とかそういうことを学びますよね、そこで、あ、それは共犯でもなかったしっていうこととか、そこで(当時、加害者に対して)かわいそうって思ってもそれは、実際それで性的接触してくるのは(加害者)の行動であって、私がかわいそうって思ったことでそうなることではないっていうこととか、たて分けられるようになったことは大きいと思う。(Dさん)

活動を通して、新しい知識や価値観を得ることで、自身の被害を捉えなおしたり、被害認識が再形成され、自責感の軽減や自分を大切に感じる感覚に繋がることが示された。

「性暴力被害を社会問題として認識する」

性暴力被害を社会問題として捉えることも自責感の軽減に繋がっていることが示された。これについて、AさんやEさんは以下のように語った。

性暴力って結構誰にでもあることだなとか、その前までは自分が上手く対処できなかったから、って今でも思ってるんですけど、でも外見内見関係なく、誰にでも性別関係なくあることだなと思います。(Aさん)

すぐに回復に至れなかったということが自分のせいではないというか、時代のせいでもあったり、なかなかそういう所に繋がりにくいっていう状況とか、活動している母数が少ないとか、環境の結果に過ぎない、だから今私もし被害に遭ったとすれば、そうやって繋がれるところがあるんだろうし、そうすれば、そこに繋がれなかったのは私のせいじゃないなって、思えるところちょっと気が楽というか。(Eさん)

このように、性暴力被害が社会的に多く発生している被害であることや、社会的な支援が不十分であることを知るなど、性暴力被害が社会的な問題であると認識することが、自責感の軽減に繋がることが示された。

「再自責」

被害を捉えなおしたり、被害認識が再形成されることで、自責感の軽減が促進されることが示されたが、その一方で、自責感は完全に消失するのではなく、揺れ動く様子も窺われた。この点について、AさんとCさんは以下のように語った。

うーん、やっぱりちょっと一般的な性暴力よりはもうちょっと罪悪感を感じるというか、やっぱり自分の対処が悪かったのかなとかいう気持ちも強いんですけど。(Aさん)

私は今までは自分に非があったとか、被害に遭った自分が悪いと自責したりする場面があったんですけど、社会的活動をして客観的に性暴力を考えると、どんな理由があっても加害者が100%悪いよねって正しい認知に近づいたなって、近づいたというよりはなったかな。客観的に見ると100%そう思えるようになった。例えば相談とか聞いてもそれあなた全然悪くないじゃんってちゃんと言ってあげられるし、自分の過去の被害をちゃんと被害として受け止められるようになったというのはあります。ただ一般的な性暴力に対してはそう声をかけられるんですけど、自分の被害に対しては、100%まだそういう風に声をかけられないというジレンマがあります。(Cさん)

2-3. 『自分らしく今を生きる』

参加者は社会的活動を通して被害のその後の人生を歩み、「本来感を得る」、「コントロール感を得る」ことで、『自分らしく今を生きる』様子が示された。

「本来感を得る」

社会的活動をしている現在に楽しさや自分らしさを感じたり、過去の被害体験について隠すことに必死になるのではなく、被害体験も含めた現在の自分の人生を歩むといったことが語られた。これについてAさん、Cさん、Dさんは以下のように語った。

(団体名)の活動で自分が助けられてる気がします。なんかもちろん他人を支援するのが活動目標だけど、どうですかね、そういう活動をしてるだけで楽しいとか面白っていかそういう感じでやって、(中略)平穏な感じです。なんかプラスマイナス、ポジティブネガティブよりは、落ち着いた感じ。(Aさん)

活動するなかで、本来の自分の姿、好奇心とか、新しいことにわくわくしたり、人と接することを、活動を通して少しずつ取り戻せた感じはしています。(Cさん)

(被害体験を)隠すことが少なくなったんです、支援の活動をしてから。(中略)隠すことのない強みっていうか、みんな弱い所を隠そうと強がる人もいる気がするけど、私は普通は隠すことかもしれないけど、そこは何人かに開示したことによって、隠さなくてもいいというか、私にとってはそこがすっきりしたところがあります。それは私の強みだと思っていて、隠す生活はしんどいので、隠さないでいるのはこんなに楽なんだと思いますね。(Dさん)

「コントロール感を得る」

社会活動への参加の後に、被害のその先の人生を自ら築くこと、またそれにより自分の力やコントロール感が生じることが示された。これについてBさんとCさんは、以下のように語った。

無力だった自分だったということを他の人に伝えることが、その人にとって、力になったって言ってもらえたことがあって、(中略) その時のやっぱり喜びはとても大きいですね。自分の経験は、凄惨でおぞましくて苦痛に満ちた被害だけで、今まではそこで終わってたんですけど、その先があったって気づけたのは、やはりこの活動をしていたからだと思います。(活動が) 始まる前までは、ただただ苦痛に満ちた、忘れたいんだけども忘れられない、でも私の体、心の中にはしっかり深いトラウマが刻まれていて、自分のコントロールではどうすることもできない所に居たんですけど、そういう苦痛に満ちた体験だったというところでストーリーが終わっていたんですけど、活動を始めてからは、その先のストーリーを今自分が作っているという、そこを肯定的に捉えることが出来ているような気がします。(中略) その先のストーリーを今私が築いているということに対して、自分の力を感じたりとか。(Bさん)

社会活動をして変化というか発展形なんですけど、社会活動を始めた時は最初は当事者活動がメインだったんですけど、(中略) 今は新しい仕事にチャレンジしています。(中略) 知らなかった世界を知れたことと、それにチャレンジできているというのは自分のレジリエンスが育ってきたからなんだろうなと思います。あとその仕事をする中で、性暴力と無縁だった人とも接する機会もすごく増えて、(中略) 社会課題解決に向けて考えるっていう共通点で交流できているので、活動をしたから人生観が変わったで収まらず、さらに自分のキャリアを築いて行けるようになったというのが大きいと思います。(Cさん)

一方で、参加者の中には、性暴力被害に関するテーマのもとで活動する中で、“自分の居場所”を感じて回復の道をたどり、その結果として被害体験にとらわれることなく、社会的活動を離れることが自分らしく居られると語る参加者も見られた。

一生懸命自分の人生を頑張っている、そういう人たちが大半なわけで、でもそれこそが回復への道だと思って(中略) 人生もっと楽に生きれるというか、被害に支配されることなく生きるっていうか、そう思うと大なる使命感を持ってやっていたっていうのは最近ではなくて穏やかにやらせてもらっているというか、やれるところでやりますという感じでやらせてもらってます。(中略) 自分を生きるっていうか、楽にというか、仮面をつけて来た人生、嘘の人生というか、それを辞めても生きていけるみたいな、それをこう実行したいっていうか、うん。できるようになっていくというか、仮面はがしても、私でいいや、私でいいって、別に恥ずかしいことないしって思えるようになったっていうか。ある種、相談員というのが一つの仮面、鎧であったというのも実際そうで、そういう鎧を脱いで、気楽に、楽に生きたいなっていう感じですかね。(Eさん)

3. 社会的活動によるネガティブな影響

複数のデータから得られたコードを検討した結果、社会的活動によるネガティブな影響として、『二次被害』、『二次受傷』、『気持ちのより戻し』の3つのテーマが抽出された。なお、社会的活動以前に二次被害に遭ったことはあるが、社会的活動をするうえでのネガティブな影響はなかったと

語る参加者も見られた。以下に、各テーマとそこに含まれるコード、具体的な語りを示す。

3-1. 『二次被害』

社会活動をする中で所属団体以外の関係者やメディア、一般の人を対象に、自身の被害体験を開示する際に、被害体験に関して当事者に対する批判的、否定的な反応を受けることが語られた。直接的な被害に加えて、開示に対して周囲の人から否定的な反応や偏見を受けたり、捜査、裁判、報道、病院受診等の過程で関係者から不快な取り扱いを受けることによる被害を二次被害と呼ぶ。本研究の調査参加者からも、社会活動に伴う『二次被害』によって、傷つきや不合理感、理解されない感覚といった心理的苦痛が生じることが語られた。

逃げられたんじゃないとか、どうして加害者の家に行ったのとか聞かれたり、あと教えてくる人もいます。男性の部屋に行くということは、セックスしてもいいということなんだよとか、意地悪なことを言うてる人もいて。(Bさん)

二次被害の中には、当事者が社会的活動をすることに対する批判的な反応を受けることがあることも語られた。

本名で活動していて私の経緯みたいなのも(ネットに)簡単に書き出していたので、それは良くないよと、そういう一般的に言われる福祉の活動は自由だし尊敬できるし素晴らしいことだと思うけど、(中略) 検索された時に性暴力=私って繋がった時に、マイナスのイメージというか本業をするうえで良くないよっていうことを注意された時があって、自分としてはまさかそんなことと言われるとは思ってなかったし、そういう活動していることも前もって言ってあったし、で消した方がいいみたいな言われたことがあって、まだ世の中のにもまだまだなんだなって思ったし、そういう斜めな見方をする人はまだいっぱいいるからって言われたのはちょっとショック。(Eさん)

Cさんは、視聴者の注目を集めるためのメディア側の悪意のある報道や、それをネット上で報道した後一般の方からのコメントによって二次被害を受けた。メディアからの二次被害に関しては抗議することが出来たものの、メディアやネット上での二次被害の深刻さについて以下のように語った。

結局団体として公式に抗議文を送って謝罪をいただいたんですけど、(中略) 一回ネット上でオープンになったらあんまり意味がないというか、モヤモヤはずっと残るものだなと今も感じています。(Cさん)

また、同じ支援者側の非当事者との間で、意見がかみ合わないことや、当事者だからと偏見を持たれることがあることについて、以下のように語られた。

(支援側の非当事者である関係者は) それ(性暴力被害)を肌身に感じてきた私たちとは全く捉え方が違うなと思います。なので話がかみ合わない、意見が交じり合うことがないというか(中略)そこで私たちは大きなダメージを負ってるんですよということが伝わらない、宇宙人と話しているみたい、石で頭を打たれたようなダメージを受けることがあります。(Bさん)

(電話対応の中で、相談者が枠を超えるような母性的な関わりを求めた際に、他の支援員は応じているが)私はどうしてもそれはできませんって言って、すごく侵入されるような感覚になるので、嫌ということをやったらそれはわかってもらえるんですけど、私が特別だからというか、Dさんは仕方ないよねってだから分かってくれるような感じがあって、(中略)あぁなんか私支援する側におっついていいかなって、常に思ってたんですけど。(Dさん)

3-2. 『二次受傷』

先の二次被害に対して、外傷体験を負った人の話を聴くことで生じる、被害者と同様の外傷性ストレス反応を二次受傷と呼ぶ。これは、トラウマ体験などの支援者として活動する方に生じやすいとされており、本調査の中でも語られた。支援員として活動するDさんは以下のように語った。

二次受傷がしんどかったケースがあって、自分とは違うケースなんですけど、想像するとすごく大変だなというケースがあって、(中略)一度(活動場所)のドアを出たらケースのことは考えないようにしているけど、帰ってから涙が出てきてということがあって、自分の体験とは全く違うんですけど、ひどいなって思うことがあって、それがすごく辛かったのは覚えてます。(Dさん)

3-3. 『気持ちのより戻し』

自分の体験を語ることによりエネルギーを使い、その後心労が生じたり、相談者の話を聞くことによって、自分の被害体験によって生じた感情が再度生じるなど、気持ちが揺り動かされることが示唆された。活動家として自身の体験を話す機会が多いCさんは以下のように語った。

体験を話してるときは高揚感が勝っちゃうんですけど、話した後の頭とか心や体とか、ダウンしちゃう時期があったりして、私はそんな何日も続かないタイプですけど、そのあと数時間とか半日とかは、疲れてパワーが起きないから他のことできないとかときはあります。(Cさん)

また、支援員として相談者の話を聞く機会が多いEさんは以下のように語った。

さっきマグマみたいな怒りを扱えるサイズにはしたって(言ったが)、でも無くなってのわけでもないし、なくしたくもないし、これは正当な怒りだと思っているので、でも相談者さんが、整理してない、もろの怒りをこっちに向けてきたときに、私の怒りがむくむくむくって出てきて乗っかる時があって、被害の内容は全く違うんですけど、怒りというものに共鳴しちゃうというか、相談者さんの怒りなのに、自分の怒りに下

手したらすり替わってしまうというか、すり替えたりそこまで行ったことは無いんですけど、そこに至りそうになることはありました。(Eさん)

上述のように、社会的活動をする当事者として、ネガティブな影響を受けることが語られたが、そのリカバリーとして、所属する団体やその仲間、重要な他者の存在が重要であることが以下のよう

に語られた。

活動をしなくてももちろんそのことを思い出して辛くなることもあるけど、心配にならないというか、しんどくても話せる相手とか、そばに居てくれるメンバーがいるから、またそういうネガティブな影響を受けても多分大丈夫だろうなという安心感もある。(Aさん)

今は二次被害を受けても、それを分かち合える(団体名)の仲間がいるので、私もこんなことあったよとか言えると、本当にこんなありえないよねって言える社会にしていこうとか、そういう消化する機会も得られているっていうことがいいですね。(Bさん)

4. 出来事中心性と精神的健康

最後に、出来事中心性と精神的健康に関して、CES得点とIES-Rの質問紙調査の結果も含めて述べる。当事者にとって性暴力被害が、人生に大きく影響を与えていることや、社会的活動によって自身の被害体験と向き合うこと、アイデンティティの中核に位置するという点については、以下のように語られた。特にCES得点が高いBさん、Cさんは以下のように答えた。

性暴力を受けた自分というのが中心に居て、そこから全ての物事を見ているというようになってきたかなという感じがします。(Bさん)

やっぱりその自分の人生の中心になっているなというのはすごく、ほんとにそれはすごく思います。それが中心に回っているというか。(Cさん)

しかし一方で、他の調査参加者からは、被害当事者であることは人生の一部にしか過ぎない感覚も生じていることが語られた。

たぶん私の人生の中でとても大きい一部分だと思うんですけど、うーん、なんか答えになってるかよくわからないんですけど、でもそのことだけが今の自分を作ったのではないし。(Aさん)

このように、被害体験が自身のアイデンティティにどのように、またどの程度の重みで位置づけられるかについては、被害体験からの時間的経過や、他の人生経験の影響などによって被害者の中でも異なることが示された。

さらに、CES 得点が高く、IES-R もカットオフ値に達している B さんはストレス体験へのコントロールの難しさについて以下のように語った。

記念日反応が毎年起こるんですが、1 年の中で具合が悪い日は、ストレスの中に、自分という存在が放り込まれたようなそういう感覚になります。自分の中、決してその中心が自分ではなくて、トラウマティックストレスというそっちの方が揺るがないというか、そっちの方が中心にあって、そこに放り込まれたりとか、そこから抜け出せないように感じるとか、いつまでこの苦痛に耐えなければならぬんだろうかとかそういう感じがします。(B さん)

一方で、CES 得点は高いが、IES-R 得点の低い E さんは被害体験について、その影響や症状をコントロールしている様子を以下のように語った。

無いに越したことはないというか、そんな被害に遭いたくなかったし、(中略) そういう環境じゃない自分として生きていたらどうだったのかなって、考えることはありますけど、まあでもしょうがないことなので、現実を見た時に、まあ受け止めたってということではないし、どう表現したらいいのかわかんないですけど、受け入れざるを得ないっていうか、受け止めざるを得ないから、しょうがないし、受け止めてやったっていう感じですかね。(中略) (被害体験は) すぐそばにあるし、それをちょっと整えてあげたっていうか、見るも無残だったし、傷の手当、血がだらだら流れてる傷なんか誰も見たくないし、気持ち悪いし、それこそ骨が見えたらえぐいしっていうのを、それをまあまあ見れる状態に手当てはしてきてっていう感じで、誰が見てもそこそこにみれるっていうくらいにもなったからまあいいかっていう表現ですかね。(E さん)

上記のように、CES 得点が高い場合でも精神的健康を維持する要因として、ストレス体験へのコントロール感が異なる様子が語られた。ただし、被害の種類が長期反復型か単回性かという違いや、重要な他者が家庭内に居るといったサポート源の違いによる影響も大きいと考えられる。

考 察

本研究の目的は、出来事中心性の観点から、性暴力被害者を対象として、社会的活動による影響を探索的に検討することであった。

社会的活動をする性暴力被害者の回復への影響 面接調査によって得られたデータの分析の結果、性暴力被害の影響、社会的活動のポジティブな影響、社会的活動のネガティブな影響に関して、それぞれの特徴を示したコードが抽出された。齊藤他 (2019) では、性暴力被害による人生への影響として『尊厳／主体性の侵害』、『親密な関係や性的関係への侵害』の 2 点が挙げられており、それらの間には自分を大切に思えない状態になることが関与していると指摘されている。本研究においても、性暴力被害による影響として概ね同様の結果が得られた。性暴力被害は、人としての尊厳を侵害される被害であり、特に、家庭内性暴力を受けた参加者は、加害者以外の家族からの二次被害

や守られなかった体験が多く語られた。このことから、活動団体が長期継続的で対等他者との関係を通して、「居場所感・安心感の構築」がなされることが被害からの回復に大きな影響を及ぼすと考えられる。

また、性暴力被害を通じた「自分の無価値化」によって、希死念慮などの「精神症状」が生じるが、社会的活動を通して「自分が必要とされる・役に立つ感覚を得る」ことは、それらの軽減に影響を与えることが示唆された。

自責感に関しては、被害当時から現在に至るまでの期間で全員に共通して複数回語られ、性暴力被害による影響として特に大きなテーマであると考えられる。社会活動を通して、一度、適応的な被害認識が形成されても、体感として獲得しにくく人生の長きにわたって自責感が払拭されにくいことが推察された。しかし、本研究で得られた結果から、被害者として様々な人から何度も、“あなたは悪くない”と言われる体験や、支援者として多くの当事者に“あなたは悪くない”と伝える体験などを通して、体験的に被害認識が再形成されると考えられる。さらに、性教育を通じて知識を獲得することや、性暴力を社会問題として認識することを通じて、自らの被害への認識が徐々に変容していくことが明らかにされた。これらを通じた自らの被害認識の再形成によって、同時に自責感が軽減されることが示唆された。一方で、被害認識の再形成を通じて、自責感が軽減されるものの、完全に消失するのではなく、揺れ動くことが示され、自責感は揺れ動きを繰り返しながら徐々に軽減していくというプロセスが示唆された。支援者や被害者の周囲の人は、自責感の軽減がこうした長期にわたる回復のプロセスを辿ることを知り、それに寄り添うことが重要であると考えられる。

野坂 (2010) は、性暴力被害では自責感や二次被害によって回復が妨げられることを指摘しており、本研究によって自責感の軽減には、『被害のとらえ直し・被害認識の再形成』が影響を与えていることが示唆されたことは一定の意義があると考えられる。特に、『被害のとらえ直し・被害認識の再形成』による自責感の軽減は、社会的活動をする性暴力被害当事者に特有の結果であると考えられる。被害を開示したうえで関わる人の数が多いことや、性暴力を社会問題として認識する仲間がいること、支援者側として客観的に性暴力を考えること、支援者として体験的に“悪くない”ことや自分を大切にすることを学ぶことは、社会的活動に特徴的な結果であると考えられる。しかし、これらは社会的活動をしていない被害当事者への支援にも活用しうる結果であると考えられる。

さらに、社会的活動を通して、被害による影響に振り回されることなく、被害を自己の人生の一部と認識しながら、『自分らしく今を生きる』参加者の姿も語られた。『被害体験の捉えなおし・被害認識の再形成』や、「居場所感や安心感の構築」、「自分が必要とされる・役立つ感覚を得る」ことを通じて『自分を大切にする』感覚を得ることによって、「本来感を得る」、「コントロール感を得る」などの『自分らしく今を生きる』ことができるという社会的活動を通じた性暴力被害者の回復のプロセスが示唆された。

一方で、社会的な偏見により『二次被害』はいまだ深刻であることや、社会的活動をする中で『気持ちのより戻し』が生じることが明らかとなり、回復を妨げる要因が示唆された。また、支援者として活動する中で『二次受傷』によって精神的健康にネガティブな影響を与えることも示唆された。

ただし、これらのネガティブな影響に対して、「居場所感や安心感の構築」がリカバリーに寄与する要因としても機能していることが示唆された。二次被害は、性暴力被害の開示を阻害する要因とされており (Ahrens, C. E., 2006), 社会的活動をする当事者に限らず、性暴力被害における二次被害に対して、長期継続的で対等な関係を築くことのできる重要な他者の存在が重要であることが示唆された。

社会的活動を行う性暴力被害者の出来事中心性 質問紙調査の結果から、社会的活動を行う性暴力被害者は、出来事中心性が高いことが示された。出来事中心性の高さは、PTSD 症状やうつ症状との関連が示されており、精神的健康に対する負の影響が指摘されていた。しかし、本研究では、PTSD 症状や被害によって生じた精神的苦痛が社会的活動により軽減されることが示された。このことから、出来事中心性が高くても、上述した社会的活動のポジティブな影響は、精神的健康を回復する要因として働くことが示され、出来事中心性が高いと推察される性暴力被害者への支援の一助となる知見が得られたと考えられる。

また、精神的健康を質問紙への回答から参加者間で比較し、その語りの内容の違いについて検討した結果、症状のコントロール感、ひいては現在のコントロール感があることが精神的健康に良い影響を与える可能性が示唆された。Ranjbar & Speer (2013) は、性暴力被害者を対象とした質的研究において、自分の現在の人生が自分のコントロール下にあると信じるのが回復に重要であることを示した。また、量的調査でも、セルフコンパッションや現在の人生のコントロール感などが、心的外傷後の主観的体験に関する保護因子であることが示されている (Hamrick & Owens, 2021)。本研究の結果から、被害の種類や、サポート源、活動内容の違いによる影響の可能性は排除できないが、圧倒的な被害による症状や心理的影響に巻き込まれずに、コントロール感を持つことは、CES が高い中でも精神的健康を回復することに役立つ可能性が示唆された。

今後の性暴力被害者支援に向けて 上述の本研究で得られた知見をもとに、今後、性暴力被害者の心理的な状態への理解が促進され、支援がそれに即したものになることが期待される。本研究の知見から、今後有効と考えられる支援策を以下に示す。

まず第一に、性暴力被害が社会的問題である認識や性暴力被害による症状・影響の理解を促す社会啓発が必要であると考えられる。性暴力被害当事者が居場所感や安心感を構築する要素として、開示や相談のしやすい雰囲気が挙げられた。具体的には偏見や否定的でない態度、当事者意識を持った関わり、被害による症状や影響の理解などが語られた。そのため、性暴力被害が社会的問題である認識や性暴力被害による症状・影響の理解を促す社会啓発をすることで、居場所感や安心感の構築や当事者の被害認識の再形成にもつながり、ひいては当事者の回復を促すことにも繋がると考えられる。

第二に、自責感の軽減はすぐになされるのではなく、多くの人に繰り返し“あなたは悪くない”と言われる体験の蓄積が重要とされることから、支援者は被害者に非がないことを諦めずに繰り返し伝えることが大切であると考えられる。また、幼少期の被害を受けた参加者は“尊厳が回復している状態や自分を大切にすることがわからない”といった、幼少期の被害特有の語りがあったことから、セルフコンパッションの形成を促すような心理教育や、自分を大切にすることに関

する体験なワークを行ったり、性暴力被害後に生じやすい心理的影響や支援に関する情報を提供することが支援の場で有効であると考えられる。

第三に、専門家による治療（例：PE療法、薬物療法）が、症状の軽減に影響を与えていることが語られ、症状への専門的なアプローチも重要であると考えられる。ただし、トラウマ体験による症状が現在も生じている参加者も、社会的活動をすることで被害による心理的影響が回復しうる可能性が示唆された。また、症状に対する専門的治療、専門家による支援（例：カウンセリング、カウンセラーがファシリテーターを務める自助グループ）、社会的活動などを通じた重要な他者との関係の構築などが相互に影響を及ぼしながら、症状の改善や心理的影響の回復が進む様子が語られた。このことから、症状に対する直接的なアプローチだけでなく、これらが同時並行的に進むことで、性暴力被害者の精神症状の改善や、精神健康の回復を促進させることができると考えられる。

本研究の限界と今後の展望 本研究の限界点として、第一に本研究の参加者が5名に限られていることが挙げられる。5名の語りから、体験の多様性が認められ、その中からある程度共通した心理的体験を抽出することができ、先行研究とも共通の結果が示された。しかし、今後さらなる参加者を集めた調査や量的な調査により、本研究で得られた知見の一般化可能性についてさらなる検討が必要であると考えられる。加えて、本研究における性暴力被害は、小児期の家庭内性暴力と成人期の単回性の被害を含んだ結果であり、被害の種類による症状の違いやその要因については、十分に検討できていないため、さらなる検討が必要である。最後に、本調査では、社会的活動をしている性暴力被害者の回復に与える影響について検討しており、被害の開示が前提にある結果であった。社会的な背景から、開示の困難さの問題があることの課題は残っており、本研究の結果の一般化には注意が必要であると考えられる。冒頭に述べたように性暴力被害には暗数が多く、被害を開示できず、一人で傷を抱える多くの被害者に対して、どのような支援が出来るかについては、今後さらなる知見を蓄積することが重要であると考えられる。

謝辞

本研究を実施するにあたり、被害者支援機関、当事者団体の方々には、様々なご示唆をいただきました。心より感謝申し上げます。何より、研究にご協力くださり、貴重なお話をお聞かせくださいました当事者の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- Ahrens, C. E. (2006). Being silenced: The impact of negative social reactions on the disclosure of rape. *American journal of community psychology*, 38(3), 263-274.
- Ahrens, C. E., Campbell, R., Ternier-Thames, N. K., Wasco, S. M., & Sefl, T. (2007). Deciding whom to tell: Expectations and outcomes of rape survivors' first disclosures. *Psychology of Women Quarterly*, 31 (1), 38-49.

- Asukai, N., Kato, H., Kawamura, N., Kim, Y., Yamamoto, K., Kishimoto, J., Miyake, Y., Nishizono-Maher, A. (2002). Reliability and validity of the Japanese-language version of the Impact of Event Scale-Revised (IES-R-J) : Four studies on different traumatic events. *The Journal of Nervous and Mental Disease* 190:175-182.
- Berntsen, D., & Rubin, D. C. (2006). The centrality of event scale: A measure of integrating a trauma into one's identity and its relation to post-traumatic stress disorder symptoms. *Behaviour research and therapy*, 44 (2), 219-231.
- Boals, A., & Schuettler, D. (2011). A double-edged sword: Event centrality, PTSD and posttraumatic growth. *Applied Cognitive Psychology*, 25 (5), 817-822.
- Burt, M. R. (1980). Cultural myths and supports for rape. *Journal of personality and social psychology*, 38 (2), 217.
- Campbell, R., Dworkin, E., & Cabral, G. (2009). An ecological model of the impact of sexual assault on women's mental health. *Trauma, Violence, & Abuse*, 10 (3), 225-246.
- Hamrick, L. A., & Owens, G. P. (2021). Exploring the potential moderating role of self - compassion on the relationships between event centrality and post-assault psychological outcomes. *Journal of clinical psychology*, 77 (1), 156-172.
- 法務省 (2020). 犯罪白書 (令和 2 年版) Retrieved from <https://www.moj.go.jp/content/001363987.pdf> (2021 年 6 月 1 日)
- Kessler, R. C., Sonnega, A., Bromet, E., Hughes, M., & Nelson, C. B. (1995). Posttraumatic stress disorder in the National Comorbidity Survey. *Archives of general psychiatry*, 52 (12), 1048-1060.
- Krug, E. G., Dahlberg, L. L., Mercy, J. A., Zwi, A. B., & Lozano, R. (Eds.). (2002). *World report on violence and health*, Geneva : World Health Organization.
- 内閣府 (2020). 性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ 支援センターを対象とした支援状況等 調査 報告書 Retrieved from https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/r02_houkoku.pdf (2021 年 6 月 1 日)
- 内閣府 (2021). 男女間における暴力に関する調査 報告書 Retrieved from https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/r02/r02danjokan-12.pdf (2021 年 6 月 1 日)
- 二宮 周平・村本 邦子 (2006). 法と心理の協働～女性と家族をめぐる紛争解決に向けて 不磨書房
- 野坂 祐子 (2010). 性暴力被害により PTSD を呈した成人女性への曝露療法 (Prolonged Exposure Therapy) 学校危機とメンタルケア, (2), 28-34.
- 大淵 憲一・石毛 博・山入端 津由・井上 和子 (1985). レイプ神話と性犯罪. *犯罪心理学研究*, 23, 1-12.
- Otake, Y. (2017). *Life Goes On: Psychosocial Suffering from war and healing pathways in northern Rwanda* (Doctoral dissertation, London School of Hygiene & Tropical Medicine).
- Ranjbar, V., & Speer, S. A. (2013). Revictimization and recovery from sexual assault: Implications for health

- professionals. *Violence and victims*, 28 (2), 274-287.
- Robinaugh, D. J., & McNally, R. J. (2011). Trauma centrality and PTSD symptom severity in adult survivors of childhood sexual abuse. *Journal of traumatic stress*, 24 (4), 483-486.
- ルービン, D.C.・バーントセン, D. 仲 真紀子 (編)(2008). ストレスフルな出来事の記憶——アイデンティティへの影響——認知心理学へのアプローチ自己心理学4 金子書房
- 齋藤 梓・岡本 かおり・大竹 裕子 (2019). 性暴力被害が人生に与える影響と被害認識との関係—性暴力被害の支援をどう整えるべきか— 学校危機とメンタルケア, 11, 32-52
- 齋藤 梓・大竹 裕子 (2020). 性暴力被害の実際—被害はどのように起き, どう回復するのか— 金剛出版
- WHO (2013). *Responding to intimate partner violence and sexual violence against women: WHO clinical and policy guidelines*, World Health Organization.
- 山本 潤 (2017). 13歳, 「私」をなくした私 朝日新聞出版
- 吉田 育美 (2012). 精神障害者にとって病の体験を社会への啓発活動の一環として語ることの意味. 日本赤十字看護大学紀要, 26 (9), 19.